
とある聖夜の超電磁砲

桐生結奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある聖夜の超電磁砲

【Nコード】

N7480Q

【作者名】

桐生結奈

【あらすじ】

クリスマス… それは聖夜にして恋人の一大イベントでもある。上条当麻はクリスマスツリーを見ながら感慨にふける。そのイルミネーションが自分にとっても不幸な1日になることも知らずに…。

クリスマス・イヴってお偉いさんの誕生日だよな【挿絵UP】（前書き）

ようやく出来ました！ 長いので連載にしました^^； 最後までお付き合いして頂けると嬉しいですv 土御門と青髪ピアスの絡みを出したかったですね、分かります↑ ■挿絵UPしました。

クリスマス・イヴってお偉いさんの誕生日だよな【挿絵UP】

12月24日、その日は聖夜前日にして「クリスマス・イヴ」と呼ばれる日であり、商売を営む店には売り上げチャンスの日でもある。今年もまた安い商品を手に入れるべく、主婦の皆さんは手に汗を握らせ、目を光らせて戦場へと向かうことだろう。

その戦場となる日からさかのぼること3日前の21日、世界で最も不幸な男・上条当麻は街のクリスマスツリーやリースを見ながら疑問を抱いていた。

「クリスマス…ねえ。もともとどこかの宗教のお偉い教祖様の誕生日なんだろうに。そのお偉いさんもお気の毒なことだな…」

溜息を尽きながらクリスマスツリーの電飾を見つめる。白と赤と青に交互に光るそのイルミネーションには癒し効果があったりする。

（なんだかんだで結構楽しんだりするんだけどな。クリスマスがなかったらこんな綺麗なものも見れなかったもんな…）

苦笑を浮かべながらイルミネーションの並々を通り過ぎていく当麻。カップルで見れば間違いなく良い雰囲気となるに違いない。だが、当麻にそんな相手がいるはずもなく。

一人で寂しくインデックスのいる学生寮へと戻るのだった。

「お姉様、もうすぐクリスマスですわね。何かご予定はありまして？ もし無いのでしたら、この黒子と朝まで愛を語り合い、2人の距離を縮めようではありませんかあっ」

「黒子、朝までしびれたいってんなら付き合ってあげてもいいわよ

？」

前髪をバチツとさせながら引きつつた笑顔で言う美琴。 フッフ
… とバツクに文字が見える。

「い… 嫌ですわ」お姉様ったら、そんな怖い顔をして。 そうです
わよね、あのいいじえ… いえ、殿方がいらつしやいますものね」
殿方、とは上条当麻のことである。 それを聞いた瞬間、美琴の
顔は真っ赤になった。

（そ… そっか…！ クリスマスだもんね…。 きつとアイツ暇だろう
し、イルミネーションを一緒に… って何考えてんのよ！？ 私っ！
??）

途中まで恋する乙女モードだった美琴だが、はつと現実に戻った。
当麻が暇人であると勝手な思い込みで決められてしまっているが
当人は当人なりに忙しいのである。 インデックスという大食漢居
候がいるために。

皮肉で言った言葉がよもや美琴に十二面相をさせる要素になろう
とは思ひもしなかった黒子。 完全に取り残されていた。

（ああ… 可哀相なお姉様っ！ 恋焦がれていらつしやいますのねえ…
あの類人猿… 次に遭ったら必ず…）

頭を抱え苦悩する美琴を見ながら、殺意を沸かせる黒子。 上条
当麻最大のピンチであった…。 かどうかは分からないが。

ぞくつと悪寒が走った当麻。 「？」を頭に浮かべながら考えた。
（俺… 風邪でも引いたのか？ さつきから悪寒が凄いんだが…。 1
2月だもんなあ… 寒いのは当たり前だけどさ… 悪化しないよう
に気をつけないとな…）

目の前には白い修道服を着た女の子がネコと遊んでいた。夕食を終え、当麻たちはのんびり時間を過ごしていたのだった。当麻はごろんと寝転び目を閉じた。

「はあゝ　なんかこういう時間って癒される…。　ずっとこうしていたい…」

「とうま…疲れているの？　それよりお腹空いたんだよ。何か食べさせて欲しいな」

「…インデックスさん…？　今しがた食事を終えた気がするのは私だけですか？　それともあれは夢の出来事でまだ食べていないと？」
呆れ顔で質問攻めをする当麻。のんびり時間はせいぜい10分ほどだ。

「夢じゃないけど、お腹空いたもん。人間は動くとお腹が空くんだよ？　そういうメカニズムなんだよ」
確かにさつきネコとじゃれていた。　それだけで夕食で食べた分のカロリーが消費されたというのか。

「…不幸だ…」

当麻はお決まりのセリフを呟きながらスナック菓子をインデックスに渡すのだった。

12月23日、明日はクリスマス・イヴだな…と思いながら当麻は街を歩いていた。店の出入り口にはクリスマスツリーを置いている。まだ明るい時間なのでライトアップはされていないが、夜になれば綺麗に彩ってくれるだろう。

「おつとカミヤん発見や、土御門。これより捕獲に入るで。とつづけきやあゝ」

青い髪の男は言うなり当麻へと体当たりをし、見事に目標を撃沈させた。

「どわああああああつ！！」

後ろから体当たりされ、そのまま前へ倒れこむ当麻。

「大丈夫かにやゝ？ 青髪ピアスもそんな無理に突撃しなくても良かったんだぜい？ まあおかげで呼び止められたけどにやー」

はっはっはっ、と笑いながらサングラスをかけた金髪の男が当麻たちの元へと歩み寄ってくる。

「土御門… お前… なら止めるよ…」

顔を地面につつぶしたまま、当麻が呟いた。

「すまん、カミヤん。 制止する前に行ってしまったから俺には止めることは出来なかったにやー。 申し訳ないと思ってるぜい」

へらへらとしながら言う土御門。 反省しているとは思えなかったが謝ったのでそれ以上は追及しなかった当麻。 怒りの矛先は先程自分に体当たりをかましてくれた青髪ピアスへと向いた。

> i 1 8 1 3 6 — 1 6 9 5 <

「おい、青髪ピアスッ！ お前は友達を街中で見かけたら突撃しなきゃいけないのかっ！？ される身にもなってみろていうかそういうことを考えるよっ！！」

「土御門がカミヤんに用があるゆーから、俺は身を持ってカミヤんを足止めたんやで？ 感謝さればこそ、怒り出すんは筋違いっちゆーもんやろ？」

「オレは頼んでないぞっ！ フツーに呼びとめりゃいいだろうがっ！！ 余計な事はしなくていいんだよっ！！！！」

片膝つきながら怒鳴る当麻にオロオロする青髪ピアス。 なだめ

ようと必死だが、怒り心頭の当麻に何を言ってもムダである。

「だいたいテメエは奇妙な言葉遣いはするわ、人をさんざん振り回すわ、拳句の果てには友達に突撃するとは酷すぎる仕打ちだと思っ
んですが上条さんが頑丈に出来ていると思ったら大間違いなんだよ
っ！ 分かったかつ！！」

奇妙な言葉遣いについては当麻も大差ない。敬語になったり、
自分の事をさんづけにしたりとおかしな使い方をしている。

そう思う土御門だが、自分もにやーとかぜいを語尾に使っている
ので同類だったりする。

これぞ正に類は友を呼ぶ、である。

「すまんかったカミヤん！ ほんまオレが悪かったでー！！ その
お怒りをお鎮めくだされえーたのんます」

青髪ピアスが拝み出した。まるで神様を拝むかのように。

「そ、そこまでしなくても良かったんだが… まっ反省しているみ
たいだし、許してあげよう」

当麻は腕を組み、えへんっと胸を張りながら自慢げに言った。

そして事もおさまり、土御門が話を切り出す前に、目の前にいたは
ずの当麻の姿はどこにもなく、青髪ピアスの細目の顔だけがそこに
あった。

「にやー、カミヤんは瞬間移動テレポートも持っていたわけかにやー 凄い特
技だぜい。 テレポートがあれば凄い便利だからにやー」

「いや、女の子が凄いスピードで突っ込んできたー思ったら、カミヤ
んの手を引っ張って行きよったで？ 見えなかったんか？ 土御門」

青髪ピアスが即答する。 どうやら当麻は女の子に連れ去られた
らしい。

「おやおや、カミヤんも隅に置けないぜい。言ってくればヤボなことはしなかったのにやー」

「ホンマやでー！ カミヤんのうらぎりものおー！！」

遺された二人の内の一人・青髪ピアスの叫びが街中に木霊した。

続く

クリスマス・イヴってお偉いさんの誕生日だよな【挿絵UP】（後書き）

禁書目録では初の連載になりますこの作品。 いかがでしたでしょうか。

至らぬところも多々あったと思いますが、感想などあれば下さると嬉しいです^^

高校生拉致が趣味だったとは知らなかったぜ【挿絵UP】（前書き）

いきなり友達の前で拉致された上条当麻。その正体は… 続きを見れば分かりますv 決してレポートの能力の人ではないのでご理解下さいって言わなくても分かりますかねw

原作では上条、としてますが私の小説では当麻と書かせて貰いますって最初に言えば良かったですね…。名前で書くのがクセなので^^；

続きもお楽しみ下さると嬉しいですv ■挿絵UPしました。

高校生拉致が趣味だったとは知らなかったぜ【挿絵UP】

とある公園で息を切らしたカップルがいた。先程まで全力で走ってきたようである。

「…オイ… いきなりなんなんだよ…？ 高校生拉致が趣味だったとは知らなかったぜ…」

息を整えながら当麻はさらった当人に愚痴る。

「う… うるさいわね…。こうでもしなきゃ、アンタって… 人の話を聞かないじゃないの…」
さらった当人も息を整えながら愚痴り返す。

「あのな… こんなことしたって誤解生むだけだぞ？ 間違いなくあの2人は誤解しただろうな」

当麻は目線をさつきまでいた方向へと向けた。

「え… ええっ！？ そ、そんなんじゃないわよっ！！ 大体なんで私がアンタなんかと…っ！！！」

顔を真っ赤にしながら否定する美琴。その後黙り込んでしまった。

「…で、上条さんに何の御用なんでしょうか？ こう見えても多忙でとっても大変なんですけど」

「多忙… ってさっきふらふら歩いてたじゃないのっ！？ あれが多忙なわけ？ 断りの口実にしか聞こえないんだけど？ …… ってケンカしに来たわけじゃないんだっただわ」

ケンカ腰に言ったかと思えば、すぐに体勢を立て直す美琴。別の用事があるようだ。

「ふらふらつてそんな歩きしてたか？　ってかいつから見ってたんだよお前ッ！？　はっ　まさかずっとストーキングしているとか？」

「してるわけないでしょっ！？　反対車線でアンタの姿を見かけたのよ。その後、アンタのいる方へ走って来たってわけ。なんか偉そうに立っていたから引つ張って来ただけよ」

当麻を見つけ、当麻を連れ去るまでの経緯を美琴は簡潔に話した。当麻はげんなりしながら聞いていた。

「クリスマス、空いてる？　空いてるわよね？　無理にでも空けなさいっ！！」

美琴はずいっと当麻に近寄りながら言った。

「空けてどうするんだよ…。無理にとか無茶言い過ぎだろビリビリ」溜息を吐きながら言い放つ当麻。美琴は俯き、ぼそっと呟いた。

> i 1 8 6 1 0 — 1 6 9 5 <

「この先のサンシャインビルのクリスマスツリーが凄く綺麗だから一緒にどうかになって…　思っただけだけでその…」

呟くごとに顔が赤くなっていく美琴。その呟きはだんだん小さくなっていった。　当麻は美琴の様子を見てクスツと笑いながら、

「オレなんかでいいのか？」

と、美琴に尋ねた。　美琴は火照った顔でこくり、と頷いた。

捻くれた言葉を浴びせるのではないかと内心構えていた当麻だったが、意外に素直に返事が返ってきたので驚いていた。

「分かった。で、どこで待ち合わせをするんだ？　ここか？」

「ほんとに…？ いいの…？」
怪訝そうに尋ねる美琴。

「いいから『分かった』って言ったんだが…御坂さん？」
当麻も答え尋ねる。

「良かった…」

美琴は笑顔を見せた。 安心したようだ。 その笑顔を見た当麻はドキツとした。

（なっ… 反則だろその顔っ！？ あれ？ 御坂ってこんなに可愛かったっけか？ そういやいつも絡まれてばっかでこんな顔見たことなかったぞ！！ 笑えばフツの女の子なんだな）

当麻はしみじみ思っていた。 いつも追いかけれ、何がどうなつて追いかけられているのか分からずだった日々。 それが今報われた気がした。

「…25日の午後6時にここで待っているから。 絶対来てよねっ！！」

美琴はそれだけ言って走り去って行った。

「クリスマスの日の夕方6時にここだな。 分かったよビリビリ」
微笑みながら囁く当麻であった。

——当麻の学生寮——

24日はクリスマス・イヴ。 家ではささやかなごちそうとケーキでインデックスは大喜びし、神に祈りを捧げ、いつもの調子でテーブルの上の料理を食べつくしていた。

「まったく、ほんとよく食べるよな……。どこに入るんだよ、その小さなお腹にさ」

呆れ顔で尋ねる当麻。正にブラックホールである。

「それはひみつなんだよ。わたしのおなかはブラックホールなんだからね」

えっへんとインデックスは威張った。

「そこ威張るところかよ……」

げんなりしながら突っ込む当麻。だが満足そうな顔をしているインデックスを見てホッとしていた。テーブルの上を片す当麻。明日の事を伝えようと、インデックスのいる方へ声をかける。

「インデックス、明日さ、夕方から用事があるから先に夕飯済ましておいてくれよ。ちゃんと用意はするからさ」

そう言った瞬間、インデックスは眉をつり上げた。

「とうま、なんのようじかおしえてくれないの？ ようじつでだけでわたしがなつとくすると思う？ 女？ 女なんでしょ？ こういふときのカンはずるどいんだからねっ！！」

「ご名答である。だからといって本当のことを話せば間違いなく噛み付かれるだろう。当麻はとっさに学校の行事だと言った。」

「あ…明日はクリスマスだろ？ ツリーの綺麗な場所があつてさ、クラスの皆で行こうってことになってな。そういうことなんだよインデックス。クラスのまとまりをよくするための一大イベントなんだっ！！ 頼む…頼みますインデックスさん！！！」

両手を合わせ、お願いする当麻。確かにツリーを見に行くのは合っているが相手は一人だ。疑いの目を向けていたインデックスだったが、彼女は学校の行事など全く知らない為、了解する他なかった。

「…そういうことならしかたないんだよ…。ツリーでくらすのしんぼくをふかめたいのなら…。がんばって、とうま」

膨れ顔のインデックス。まだ納得できない顔であった。

「あ、有難う御座います！インデックスさまあ！このご恩は一生忘れませんっ！！」

ははあと拝みながら当麻はお礼を言った。

（学校のこと詳しく知らなくて良かったぜ…）
心の中で安堵する当麻であった。

続く

高校生拉致が趣味だったとは知らなかったぜ【挿絵UP】（後書き）

半分まで来たってところでしょうか……。これから奮闘が始まるわけですが^^； ギャグにしちゃった感が否めませんw もともと面白いのが好きなのでww

シリ阿斯が書けない自分に乾杯（・・）b

25日の午後6時にここで待ってるから【挿絵UP】（前書き）

前回、上条当麻に無理矢理約束を取り付けた御坂美琴。その思いは果たして彼に届くのか…。の前に女子にとって、また常盤台の学生にとっても大問題が発生する。その大問題とは…。

無理矢理な約束と大問題が交差する時、美琴の苦勞は始まる… か
もしれない。

25日の午後6時にここで待ってるから【挿絵UP】

- 常盤寮 -

そして25日、クリスマス。約束の日。半ば強引に取り付けた今日の約束。常盤台の超電磁砲<レールガン>御坂美琴は、2日前の出来事を思い返していた。

(…25日の午後6時にここで待ってるから。絶対来てよねっ！)
今思えば凄く恥ずかしいことである。美琴は顔を赤く染め、ぶんぶんと左右に振り、火照りを収めようとする。が、その時、

「お姉様… さつきからそわそわしていらっしやいますのね…？
今日は御用事でもおありでした？」

さすがに美琴をストーキングしてるだけあって美琴の不審な行動はすぐ見破られる。だが、それでも美琴は何事もなかったような態度で答える。

「…あはは、やーねー黒子ったら。別に何も無いわよ。ただ今日はクリスマスだな〜って思っただけよ」
苦笑しながら手を左右に振る美琴。

「そうですね。クリスマスは今年の冬の一大イベントなので、から、感慨にふけるのもムリはありませんわ」
疑いの目を向けながら黒子は語った。

「まーね。恋人同士なら最高の日になるんだろうけど」
何気無い美琴の一言。黒子はそれを聞き、すぐにあの類人猿の

事を思い出した。 類人猿とは当然 “ 上条当麻 ” である。

（何なのでしょう… この嫌な胸騒ぎは…。 まさかお姉様、今日のこの神聖なる日にあの忌まわしい類人猿と会う約束などしてはいませんわよねえ…！！）

ワナワナと打ち震える黒子。 全身殺気のオーラに包まれていた。

「黒子？ どうしたのよ、どつか具合でも悪いわけ？」

後輩を気遣う美琴。 黒子はじいじと感動し、膝を折り、その場に崩れ落ちる。

「ああ、お姉様。 黒子を気遣って下さるなんて、何か良い事でもありましたのね…！ いつものお姉様なら、黒子がたとえ血まみれになって倒れていたとしても気遣うなどしなかったことでしょう…」

「アンタね… あたしの事そんな風に見てたわけ？ これでも一応気遣うわよ、 後輩なんだから」

「嬉しいですわ、お姉様…！」

美琴に飛び掛る黒子。 美琴はそれを避けて黒子のお腹に膝蹴りをお見舞いした。

「ぐふっ さ、さすがお姉様…！ 隙がありませんわね…」

「まあね。 これでもレベル5だからね」

ああ〜となめやかな言葉を発しながら黒子はその場に頭から崩

れ落ちた。 美琴の圧勝だった。

（まったく 黒子のヤツ感づいたかしら？ 勘だけは異様に良いのよね。 ま、それが黒子の利点でもあるんだろうけど）

約束の時間まであと2時間。 休日も美琴達は学校の制服だ。規則によって定められているため、いつも制服なのだがこの日はやはりそういうわけにはいかない。 美琴はクローゼットを開け、今日着て行く服を選び出した。 2時間もあれば服を決めることができるだろうと思っていたのだが、そう上手くはなっていないこの世界だった。

どの服を着ようか迷う美琴。 ワンピースは子供っぽいだろうし、短パンだと色気がない。 ロングスカートだと動き辛いし、ジーンズもピンとこない。

あれこれとクローゼットから引っぱり出すうちに部屋は美琴の服で散乱していた。 先程崩れ落ちていた黒子も服の山と化し、どこに眠っているのか見当すらつかない状態である。

「んもー！ 何着ればいいのよっ！！！！」

そう言つと美琴は身近にあつた服を放り投げた。　ますます部屋は散らかるばかりである。　一向に決まる様子はない。　そうこうしている内に時間だけが過ぎていき、　約束の時間まで30分を切っていた。

「決まらないわ…。　それどころか部屋のほうが大変なことに…このままだと寮監に怒られてしまうわよね…。　どうしよう…」

困り果てる美琴。　その美琴の背後に一つの影がゆらりとつこめいた。

「お姉様？　何を…　なさっていますの？　黒子はサンドバッグではありませんし、部屋は散らかし放題。　寮監が見たら間違いなく説教と罰が待っていますの。　この状況、黒子に説明して下さいますわよねえ？」

にこおつと黒い笑みを浮かべる黒子。　目を覚ませば自分は服の山と化しているのだから無理はない。　美琴は良い事を思いついた。　美琴の頭の上には豆電球が点っていた。　そして体をくねらせる。

「ねえ、黒子。　お姉様をお願い聞いて欲しいのぉ　ダメ？」
顔を赤らめ、美琴は黒子に『お願い』をした。　黒子は鼻息を荒くして答える。

「はっはい！　お姉様！！　黒子に出来ることならなんなりとおっ！！」

目からハートを飛ばしながら、黒子は一步手前に近づく。　そして美琴は含み笑いをしながらその『お願い』を告げるのであった。

「コーディネートをお願いしたいの。あと20分でお・ね・が・い」

美琴のお願い作戦は見事成功を収めるのであった。

続く

25日の午後6時にここで待つてゐるから【挿絵UP】（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 美琴にとっての最大の敵が現れてしまいましたw

黒子を落とすことは美琴には朝飯前だと自分は思っていますww

今回、上条さんでてませんけどね！ここに不幸があつたんだよ上条さん！！＼（＾o＾）／

挿絵はいつもながら後日UPさせて貰います（ゝ；ω；ゝ）待つている人がいなくてもすみません（＾q＾）↑

感想あればお待ち致しておりますvv 次回で完結できると思いますww

■挿絵UPしました。

クリスマスツリー見に行くだけなんだしな、こんなんでいいだろ【挿絵UP】

というわけでかなり遅くなりましたが、最終話です^^;あれこれあってなかなか更新出来なかったです……—、—。

名残惜しいですがこれで最後です↑ 最後まで楽しんで貰えたら
光栄ですv

クリスマスツリー見に行くだけなんだしな、こんなんでいいだろ【挿絵UP】

その頃、上条当麻は目的の公園へと先を急いでいた。 こちらは至って普通の格好である。

（クリスマスツリー見に行くだけなんだしな、こんなんでいいだろ）

当麻の服装は、ダウンジャケットの中にTシャツ、下はGパンという格好だった。 青髪ピアスが以前、女の子とのデートのノウハウを耳に穴があくまで聞かされた当麻。 土御門もいたが、途中で用が出来たと言い、当麻一人4時間ほど付き合わされたのであった。 その時のことを思い出し、歩きながら

「不幸だ…」

とつぶやくのであった。 青髪ピアスが熱弁して聞かせたデートのノウハウは終わったと同時に当麻の頭から飛んでいったのである。 ムダに終わったデート講座、今こそ発揮すべきところだったりするのだが。

「青髪ピアスがいつてたっけなあ。 待ち時間よりも30分前には行っておくことって。 もう30分前じゃなく20分前だけだな」

ちらりとコンビニの時計を見やる。 遠目でも充分時間を知る事が出来る大きさの時計だ。

「少し時間あるし、ビリビリになんかあったかいもんでも買ってるかな」

そう言って当麻はコンビニへと入って行った。そして温かいコーヒーと紅茶を手にとった。美琴の好きな飲み物を知らないため、無難なものを選んだ。

（両方買っとけばどうにかなるだろ）

当麻は苦笑しながらレジへ向かい精算した。

コンビニを後にし、再び目的地へと足を運ぶ。5分後、目的地へと着いた。美琴の姿はまだない。

「早かったか…。まだ10分はあるもんな」

ふう、と溜息を吐きながら、当麻は近くのベンチに座り美琴を待つ。

辺りは薄暗くなっていた。小一時間前までは明るかったように思えたのだが流石冬で12月だけあって、日の暮れも早かった。薄暗さと共に気温は下がってゆく。

「今年もあと少しか…。短かったな」

「年寄りくさいセリフ吐いてんじゃないわよ」

息を切らせながらのその声は当麻のつぶやきに向けた言葉だった。

「ビリビリ、ようやくお出ましか。ったく人を呼びつけておいて開口一番がそれですか。ふざけんなよ…。ほら温かいの買って

おいた。　　ってもうぬるくなっちまってるけどな」

当麻はコンビニの袋を美琴に渡した。

「どっちか選んでくれ。　お前の好きな飲み物分からなかったから、
コーヒーと紅茶しかないけどな」

「あ、ありがとう……。　私の分まで買ってくれるなんて、良い所も
あったりするのね」

顔を赤く染めながら感謝と皮肉を言う美琴。

「上条さんは優しさだけが取り得なんですって俺、自分で言ってる
恥ずかしいじゃねえか！！」

大声で叫ぶあたり、すでに恥ずかしいの域を超えていると思うの
だが。

「アンタねえ……　一人ツツコミは止めなさいよ、虚しくなるだけだ
から」

呆れた表情の美琴。手に紅茶を取り、コーヒーを当麻に渡す。

「まあ、一応お礼だけ言っというてあげるわ。　感謝しなさいよね、
こんな可愛い子からお礼を言われるんだから」

「……なあオマエ、言ってる虚しくねえか？　それこそ」

「う……うるさいわねっ！」

バチイツと美琴の前髪が火花を散らす。

「ちよつ御坂さん！？　ここで放電は止めた方がいいと思いますよ？　ほら人もいますし、こんなことしたらツリーのイルミネーション見れなくなりますから！！」

当麻は慌てて美琴をなだめる。自分の言った言葉が火種となったことも忘れて。

「はっ　そうだった、行くわよっ！　早くしないと人がいっぱいで見れなくなっちゃうわ」

美琴は言うなり当麻の手を引つ張って走り出した。

「つてえ！？　走るんですかぁ！？？　ちよつ　御坂さん？」

「黙って走って！　アンタの手握ると何故か能力が使えないけどこの際仕方ないわっ！！」

「はぁ…　ですからこの右手はですねえ…」

「いいから、黙って走りなさいよーっ！！」

息を切らせ、美琴と当麻はツリーの目的地へ着く。　途中大勢の人込みに襲われたが、すり抜けてきたのだった。

「間に合ったみたいね…。良かった、ライトアップを見逃したらイミがないじゃない」

「よ…、良かったな御坂…。これからみたいだぞ」

2人とも息を切らしながらツリーを見上げる。そして数分も経たない内にライトアップされていく。その瞬間を見て美琴は微笑んだ。楽しみにしていただけあってその感動は、計り知れないものだったようだ。美琴の様子を見ていた当麻はホツとし、そして

「メリークリスマス、御坂」

と、微笑みながら言った。

「メ、メリークリスマス…。あ、ありがとね。一緒に見られて嬉しかったわ」

顔を真っ赤にしながらお礼を述べる美琴。もじもじしているのがとても可愛らしかった。その行動を見た当麻はつられて顔を真っ赤にする。

「お、おう…。これくらいお安い御用だっ…」

たじたじになりながら当麻は口を動かす。下手なことを言えば、戦場と化すことになりかねないので言葉を選びながら。選んだ言葉がおかしかったが。

> i 2 7 8 7 0 — 1 6 9 5 <

「ふ、ふうん…。お安い御用なんだ…。」

ツリーを直視しながらつぶやく美琴。その表情はかすかに嬉しそうだった。

ツリーを眺めて20分くらい過ぎた。　流石に寒くなって来た当麻は

「なあ御坂、寒くなって来たしめし食いにでもいくか？　あ、嫌なら帰ってくれて構わないんだが…」

「アンタのおごりなら行ってあげてもいいわよ？　こんな可愛い子を誘うんだからそれくらいしてくれるわよね」

上から目線の美琴。　だが背は当麻の方が高いため、見上げる形になっているが。

当麻は　なまいきなヤツ…　と思いながらも口にはせず、にっこりと微笑み、美琴の手を引っ張りながら口を開いた。

「分かりましたよ、さて行きますかお嬢様。　ここは寒いですよ。　さっさと参りましょう」

まるで執事のような喋り方の当麻。　美琴は気味悪がっていたが、当麻の後についていく。

おぼろげに光るクリスマスツリーのライトを背にしながら2人はその場を後にしたのだった。

その後、上条当麻は相変わらず、御坂美琴に追いかけられるが、美琴の表情が少しだけ和らいでいたりした。

「やっぱりこうなるのかよっ！？ふ、不幸だあ~~~~~」

E
N
D

クリスマスツリー見に行くだけなんだしな、こんなんでいいだろ【挿絵UP】

いかがでしたか？感想お待ちしてます。次は…ひなまつりの話かなとww

挿絵はまた後日になります申し訳ないです（ノω、）。・。+

■挿絵UPしました、長らくお待たせしました…^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7480q/>

とある聖夜の超電磁砲

2011年10月7日15時04分発行